

第1回鳥取県幼児期の教育内容等深化・充実調査研究実行委員会

日時 平成29年8月28日（月）
午後3時30分から午後4時30分まで
会場 中部総合事務所 302会議室
参加者 鳥取県幼児期の教育内容等深化・充実調査研究実行委員（9名）
鳥取県幼児期の教育内容等深化・充実調査研究実行委員会事務局（6名）

【内容】

①鳥取県教育委員会（鳥取県幼児教育センター）が実施している取組について

*これまで行ってきた取組（幼保小連携推進モデル事業を含む）について、

②円滑な接続を進めるにあたって効果的な取組について

*今後の取組に向けて、円滑な接続をめざした取組について、大切にしたいこと、工夫、改善すべき点等

- 肥後委員長
- ・取組を始めて1年になる。1年やってみて、困っていること、見えなくなっていること、県のサポートとしてほしいことなどを含めて、御意見をいただきたい。
 - ・4つのモデル市町のよさは、それぞれがしっかりと取組を進めていること、また、取組の方向性がそれぞれ違うことである。
 - ・御苦労の部分についても話をしていただければよい

《鳥取市の取組》

- 中村委員
- ・本当はこんなにはやく接続期のカリキュラムを作る予定ではなかった。園の先生方がとても積極的に、実践して検証、改善するため、活用する予定の10月（H28年度）までにある程度の形にするというスケジュール感をもって取り組んだ。
 - ・鳥取市の醇風小学校区の特徴として、校区（3園）の子どもは醇風小学校にはあまり行かないことがあげられる。
 - ・近くに園はあるが入学して来ないという小学校や、この園からは1人しかA小学校に行かないという園にとって、「連携はできない」といえないモデルとして、園、小学校の先生方に御理解いただけるものとする。
 - ・醇風小学校区での取組は意義があった。先生方に力をいただき形（鳥取市版リーフレットの作成等）にしていく予定である。市教委としては、どの場で、どの形で、どれくらいの頻度で提案していくのがよいか考えている。
- 肥後委員長
- ・必ずしも子どもが接続していく場所ではない都市部の難しさがある。それにかかわらず3月（園）と4月（小学校）以降をつなげるカリキュラムがあり、中身が接続していることが記載されている。園のカリキュラムに小学校のカリキュラムが書いてある。このことが大切である。
- 事務局
- ・県内の小学校の中には、多いところは20園から入学している現状がある。鳥取市の取組を米子市等の都市部に広めていきたい。
- 肥後委員長
- ・醇風小学校区での取組は、必ずしも子どもが接続する場所ではない園と小学校が協力しているという事例

- 西川委員
- ・鳥取市では、保小連携の公私立の園の小学校への窓口は副園長が担うよう位置付けている。
 - ・1園から1小学校へほぼ就学する場合、連携が深まっていると思っていたが、実は、連携ができていない場合があることが分かった。
 - ・何のために、どのように接続していくのかについて、園と小学校がお互いに確認できていない現状がある。
 - ・園が作成しているアプローチカリキュラムにある力が小学校にどうつながっているのか、小学校で力が発揮できているのかなど、1園からいく園は、中身の確認・検討をする必要がある。
- 肥後委員長
- ・1園と1校であってもつながっていないことも多い。幼稚園教育要領でもある、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有する（10の姿を手がかりとして）ことから始めることが大切と考える。

《倉吉市の取組》

- 福田委員
- ・倉吉市は、平成21年に「幼児教育研究会」を設置し、園長、小学校校長、教育委員会、保育担当課で役員会を構成している。
 - ・幼児教育研究会のよさは、行政だけではなくてみんなで進んでいく方向を相談しながら一緒に協力して取り組んでいること。
 - ・全園（全施設種）、全小学校区で取り組み（40施設）、足並みそろえて子どものためがんばろうという気持ちがある。しかし、実際には難しい面もある。
 - ・連携について考えるほど「何をもって連携というのか」「どうなったら連携しているといえるのか」知りたい。
- 泉委員
- ・自園の小学校区には3園あり、これまであまり園同士の交流がなかったが取組の中でつながりが出てきた。横の連携の形、実際のつながりができてきた。
 - ・先日の鳥取県幼保小連携推進研修会（H29.7.27）で、園と小学校の差異（「伝える」「協力」「体を動かす」等）について具体的に小学校区で連携を行っていくことを学んだ。
 - ・県は、「遊びきる子ども」を掲げている。現場で保育士が「遊びきる」をどう捉えているのか、「子どもが遊んでいる」のか「子どもを遊ばせている」のかも含めて考えていきたい。
 - ・本日の講義（連絡協議会：講演）の中で、「聞こうとする」子どもを育てるために何ができるのか考えていくことについても、課題提示をいただいた。
- 日野委員
- ・今回の教育要領の改訂で、カリキュラムマネジメント、10の姿が示された。しかし、環境を通して学んでいく土台の部分は変わらない。そこに自信を感じている、
 - ・10の姿は、幼保小学校が両サイドからそこをにらんでいくための大きな指針になる。今後、幼保小連携カリキュラムを編成して、カリキュラムマネジメントを進める上で、10の姿をどう落とし込んでいくのか。可能か可能でないかは分からないが、カテゴリ分けができると使いやすい。
- 肥後委員長
- ・このたびの改訂では、「3つの資質能力」「10の姿」「5領域」について、誰も整理しないで進んでいる状況。一つの仮説だが、わたしたちはこう考えましたというものをやってもよいのではないかという気持ちをもっている。

《日野町の取組》

- 砂流委員
- ・日野町は、保育園1園、小学校2校、中学校1校の小さい町なので、保小中の教職員がお互いを知っているという感覚でいたが、全くそうではなかった。
 - ・昨年度、本町の小学校教諭が保育園での長期社会体験研修を実施した。その研修を通して、初めて園の先生方を知ったという状況だった。
 - ・この取組をとおして、子どもたちの育ちをみること、どんな保育が行われているか、小学校に入学してからどんな教育が行われているかをまず知ることをすすめていきたい。
 - ・しかし、今年は研修生がいない。誰を中心にしてこの事業を進めたらよいのか考えている。将来的に続くものとするためには組織で取り組むことが重要と考える。
 - ・管理職の意識が大切。子どもたちの育ちをつないでいくために必要な取組を見直していく。取り組むことによる多忙感と分けて考えてもらえるようにしていかなければならない。
- 肥後委員長
- ・組織が中心となって取組をすすめる時、中心となる存在をはっきりとすることは大切である。しかし、小さい地域だからこそ、1人に負担がかかる。人が変わっても続く取組とするためには、着地点をどうするのが重要となるだろう。

《若桜町の取組》

- 岡崎委員
- ・これまで連携はしているが教職員一人一人が意識しているか検証する必要がある。
 - ・若桜町は、体力向上、健康を全面に出しながら重点的に取り組む。他の領域は重点でないからといって取り上げないわけにはいかない。着地に悩んでいる。
 - ・カリキュラムありきでなく、実態を踏まえて子どもをどう育てるのか、15歳まで、接続した先にどんな子どもになるのかということも見やすい地域だと思う。しっかりと接続期のあり方を考えていかなければならぬ。
 - ・今作っているのもカリキュラムの1つ。この事業の中でこのカリキュラムをどう発展させるべきか考えている。
 - ・自分は小学校の出身のため幼児教育に詳しくない、概要的なことは話せるが、幼稚園教育要領等との整合性については、園長先生と連携している。
- 肥後委員長
- ・事業としてというよりも、自治体にとってどのレベルのカリキュラムを、どれぐらいの大きさで作っていくのか、維持管理の問題がある。
- 岡崎委員
- ・小さい町なので、先生方は忙しい。集まって何かする時間が取りづらい。その中で何かを作っていく時間のとり方、組織運営を考えたい。
- 矢部委員
- ・取組はこれまでも行っているが、事業としての連携のあり方や幼児期の体力向上について考えていきたい。
 - ・小学校の体育とは違う。園では、多様な動きをしっかりと経験して運動が好きな子どもを育てたい。
 - ・園で身に付けた力が小学校につながっていくと考えると、運動しているときの集中力とか俊敏性などの力が、小学校における力にどう結びついていくのか考えていく必要がある。
 - ・1つの遊びにおいても、集団遊びのルール、友達との協力、運動など、いろいろな力を付けるための工夫ができる。自分たちがしている遊びを健康面、運動遊び、体力向上という視点で、小学校にどうつながるのか、もう一度考えてみたい。
 - ・幼児は、各年齢15人から、多くて20人。個人差はあるが、技術的なことを求めるの

ではなく、体を動かすことが楽しいと思えるようにするために、いろいろな方の専門的な指導をいただき取り組んでいく。

- ・スケジュール感をもって取り組んでいきたい。

肥後委員長

- ・12月までにきっちり成果を出す必要はない。
- ・鳥取市と若桜町は違うかもしれないが、この地域には、一人一人に目が行き届くよさがある。〇〇くん、〇〇さんがどうなっていくのか共有できる地域。一人一人の子どもの特性を伝えることが幼保小連携の中でできる。個の部分はどう接続していくか考えることもよい。

日野委員

- ・体力に特化した取組は、いろいろなところに広がっていく。
- ・本園でも、土踏まずの形成等をめざして体を動かすことが、言葉になって思いを表出していくという仮説を立てて研究を進めている。
- ・どんどん取り組んでいくとよい。

肥後委員長

- ・焦点化することは大切
- ・評価の視点をどうもつか大事。文科省は10の姿を示しているが、幼児期の終わりに相対評価、絶対評価するのではない。
- ・本気で取り組むのであれば、1年生で評価したら終わりではなく、小学校のどの時点で評価するか小学校まで引っ張って評価するとよい。
- ・10の姿は一生かかっても難しいところもある。小学校の終わりにどうだったかを考えてもいいぐらいの大きさをもっている。
- ・幼児期の終わりと小学校の初めだけでつながりをみてしまいがちだが、幼児期の「遊びこみ」の成果が、小学校の3、4、5、6年の抽象的な学習に入っていくときに力を発揮するもの。これを評価することができれば、小学校の教員に周知する一番よい方法だと思う。
- ・また、どれぐらいの期間で評価するのか評価のスパンを考えることも大切である。

《ハンドブックの内容について》

事務局

- ・今回の委託にあたり、必ず成果を出さなければならないということはない。よい、悪いではなく、取り組んでみて市町村の課題や悩みを教えていただきたい。それを受けて県がハンドブックを作るようにという文科省からの依頼がある。
- ・カリキュラムを作成するにあたって、経緯、手順、編成例をあげてほしい
- ・倉吉においては、全ての小学校区で取り組んでいる。それぞれの小学校区の特徴が出ているカリキュラムが出るとよい。

肥後委員長

- ・それぞれの取組がどんな課題意識から始まっているか、どんなことをめざしているのか、何年間取り組んでいるのか、取組の柱は何か、仮の成果としてどんなことがあるか等が大切だと分かった。
- ・成果としては、カリキュラムマネジメント、地域と連携して地域に開かれた連携カリキュラムになっていることが大切。

砂流委員

- ・配布先となるのは全ての園、小学校、特別支援学校などが、これからカリキュラムを作るにあたって参考となるものということが重要。
- ・その園、学校がどんなことを求めているかを把握しないと単なる実践事例集になってし

まう。うまく構成していかないと役に立つものにならない。

- 肥後委員長
- ・そのことがあるので課題意識を共有することは参考となる。地域によって課題は違う。そのあたりを書き起こすことが大切。
- 事務局
- ・ハンドブック県教委が作成する。市町には過重な負担をかけることはない。実践をあげていただいて、県全体に広がるようなものにしたい。
 - ・それぞれ単独で作成するのではなく、つながっているカリキュラムを編成したい、園（年長）と小学校（1年生）がつながるだけでなく、園の中でも、小学校の中でも1年生・2年生で完結するのではなく6年生までつながるものであるという考え方を大切にしたい、つながっているものとしてほしい。
- 肥後委員長
- ・小学校には学びのつながりを示したカリキュラムはあるが、学びの土台をどう作るかについてのつながりが弱い。大枠としては、その2つについて作ることにするのではないかと。
- 矢部委員
- ・おもに年長と1年生担任で作っているが、基礎となる0歳からのつながりが大事だと思っている。それが分かる形になればと思う。
- 肥後委員長
- ・つまづかないことが大事なのではなくて、その子のつまづきをしっかりと見てつなぐことが大切である。その子どもがあの頃はこうだったということが見える地域に住んでいる。その姿をつないでいくと見えてくることもある。保育者と小学校教職員がその姿をつなぐことによって、子どもの今の姿や育ちがよく見えることになるのではないか。
- 事務局
- ・9月には事務局担当が肥後委員長に助言をいただきに島根大学に伺う予定。取組にあたり、助言をいただきたいことがあれば、お知らせいただきたい。あわせて相談をさせていただく。
 - ・この取組の成果が全県に広がっていくようにしたい。
 - ・できる限り、ニーズの把握を行うとともに、モデル4市町の実践をいただきながら、カリキュラム編成の意義や効果的な取組について、内容を充実させていく。